

はじめに

緒言

調査概要

調査結果

市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯

資料編

Ⅱ 調査概要

2-1. 調査の目的と方法

2-2. 建物の概要

2-3. 設計者の概要

2-4. 都城市民会館の歴史

2-4-1. 設計段階

2-4-2. 着工から竣工まで

2-4-3. 竣工後

2-4-3-1. 豪雨による漏水

2-4-3-2. 外部鉄骨の耐火被覆モルタルの撤去

2-4-3-3. 2階（楽屋・道具庫等）の増築

2-4-3-4. エレベーターの設置

2-4-3-5. 電気室の増築

2-4-3-6. 設計から閉館までの年表

2-5. 参考資料

はじめに

2-1. 調査の目的と方法

今回の調査では、解体の決まった旧都城市民会館（以下「旧市民会館」という）の最後の姿を写真や図面で記録するとともに、解体調査を通じてこの作品の最大の建築的特徴、すなわちメタボリズム建築としての「革新性」とその技術的な工夫についての詳細な記録を取ることを第一の目的とした。そのための手順として、まず当時の設計担当者である遠藤勝勸氏（旧菊竹清訓建築設計事務所元所員）の助言に基づいてその顕著な特徴を示す部位を特定し、次に事前に旧菊竹事務所に保管されている当初の設計図や古写真を確認しつつ、その技術的な特徴を遠藤氏に解説していただき、そして解体調査では可能な限りそれらの部位の採取・保存を試みた。遠藤氏によれば、菊竹氏の革新的なアイデアを実現するために膨大なディティールの検討が行われたとのことであり、今回は資料調査ではディティールに関するスケッチや工事関係資料の搜索を、解体調査ではその施工状況の確認などを重点的に行った。

次に、旧市民会館が持つ「作家性」としての価値を考察するため、上記の調査で注目したような革新的な工夫が1960年代の菊竹作品とどのような影響関係にあるか、遠藤勝勸氏へのヒアリング調査を行った。氏によれば、特に当時の事務所の総力を結集して作成された国立国際会館（現国立京都国際会館）の設計競技案（1963年）の影響は大きく、東光園（1964）を含む1960年代の菊竹作品に大きな影響を与えたとの可能性が示唆された。

これらの調査と並行して、旧市民会館の持つ「地域性」としての価値を考察するため、竣工後の建物のさまざまな使われ方について、当時の新聞記事などを参照して情報を収集し、また近年の保存活用に関連する市民運動の経緯についても新聞記事などを中心に情報を収集した。旧市民会館の活動記録は、都城市の現代史を伝える記録としての価値を持つものであり、1960年代の地方都市において公共文化施設が担った文化的価値の一つの典型性を示すものと考えられる。

なお、各章での調査結果のまとめ方については、調査結果のわかり易さとその根拠となる豊富な情報提供を同時に示すため、調査項目ごとに冒頭に解説を付し、続いて調査結果を示すこととした。



Fig.2-1-1.2019年9月2日解体の様子撮影斎藤信吾

2-2. 建物の概要

旧市民会館は、宮崎県都城市が市政40周年を記念して1966年に開館し、40年間にわたり都城市の芸術・文化の拠点として多くの市民に親しまれてきた。時にザ・ドリフターズが来るなど閉館まで成人式や結婚式をはじめとして、様々な催しに活用された。建築家菊竹清訓（1928—2011）の設計から生み出されたその唯一無二で独特な形態はわが国のみならず、国内外の重要な美術館で何度も展示され、世界中の建築関係者が訪れたい建築のひとつになるなど、世界に広く知られている貴重な建築である。

2006年に都城市総合文化ホールの開館に伴い、一旦、都城市市議会で解体が決議されたが、南九州学園が20年間の無償借り受けを申し出て、解体の中止が決定された。しかし、現実にはその活用が多額の費用を要することから、他の施設整備を優先することとなり、約10年間未利用のまま放置されていた。2017年に南九州学園が返還を申し入れ、都城市は、これまでの経緯や市民の意向、財政状況、建物の価値などを踏まえた上で、日本建築学会と検討を重ねたが、再生活用の具体化にはつながらず、2019年に市議会にて解体予算が可決され、同年に解体へと至った。

緒言

調査概要

調査結果

市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯

資料編

【建築概要】

建築主：都城市
 所在地：宮崎県都城市八幡町3街区
 総事業費：2億3200万円
 施工期間：1965年3月-1966年4月
 設計：菊竹清訓建築設計事務所
 構造：早大松井源吾構造研究室（担当：依田）
 設備：早大井上宇市設備研究室（担当：水野）
 監理：都城市役所建築課（担当：内村春二）
 菊竹清訓建築設計事務所
 色彩計画：粟津潔
 アルミ緞帳設計製作：伊藤隆道
 音響指導：NHK 総合技術研究所
 ストーンスピーカー：彫刻：田中充秋，
 音楽：秋山邦晴，音響：奥山重之助
 施工：鹿島建設九州支店
 鉄骨工事：川岸工業
 電気工事：九州電気工事
 冷暖房・空調工事：昭和設備工事

【建物情報】

構造：鉄筋コンクリート造，ホール上屋 鉄骨造
 階数：地上2階，一部中2階
 設備：冷暖房空調（セントラル方式）、給排水、
 電気、衛生、舞台装置、音響、舞台照明
 高さ：軒高 25.70m
 深さ：基礎下端まで 2.40m
 面積
 敷地面積：4,604.30㎡
 建築面積：2261.40㎡

(竣工時)		(解体時)	
延床面積		延床面積	
	3065.64㎡		3065.64㎡
各階面積		各階面積	
1階	1552.65㎡	1階	1,703.64㎡
2階	1417.65㎡	2階	1,796.91㎡
中2階	95.34㎡	中2階	95.34㎡
計	3,065.64㎡	計	3,595.89㎡
ピロティ	608.25㎡	ピロティ	608.25㎡
合計	3,673.89㎡	合計	4,204.14㎡

【施設概要】（竣工時）

地階：機械設備室、電気設備室、浴室
 1階：結婚式場、控室、着付室、理容室、宴会室
 食堂、会議室3室（150～200人）、
 応接室、館長室、事務室、売店
 2階：客席（固定椅子1500席、収容1800人）
 ステージ、サイドステージ、楽屋（4室）
 屋外会場、バルコニー
 中2階：調光室、音響室
 3階：映写室

参考：

『菊竹清訓 作品と方法 1956-1970』 / 菊竹清訓・川添登編 / 美術出版社 / 1973/p.248-249
 『新建築 1966年7月号』 / 新建築社 / 1966/p150-158

はじめに

緒言

調査概要

調査結果

市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯

資料編



Fig.2-2-1. 竣工時の様子 撮影：小山孝

はじめに

2-3. 設計者の概要

旧市民会館を設計した菊竹清訓(1928-2011)は1928年に福岡県久留米市で生まれた。早稲田大学理工学部建築学科を卒業後、竹中工務店、村野・森建築事務所を経て、菊竹清訓建築研究所を設立(後の菊竹清訓建築設計事務所)。1960年東京で開催された世界デザイン会議において結成された日本近代建築運動メタボリズム・グループのひとりで、今なお世界から注目され続けている。国内外にメタボリズムの思想を反映させた多くの実験的で先見性のある建築作品を生み出した。菊竹は生涯を通じて582作品以上の建築作品(斎藤信吾調べ)、ならびに数多くの書籍を執筆した。著作の中でも特に、「METABOLISM/1960—都市への提案」と「代謝建築論 か・かた・かたち」は菊竹の建築思想を示した代表的な著作である。当時ではあまり見られなかった方法論を用いる建築家として自身の〈か・かた・かたち〉の三段階方法論を実践する形で設計を行った。

主な建築作品として《出雲大社庁の舎》1963、《ホテル東光園》1964、《江戸東京博物館》1992などがある。1959年に菊竹清訓をはじめ、浅田孝、黒川紀章、大高正人、栄久庵憲司、栗津潔、槇文彦ら日本の建築家・都市計画家グループによって始まった建築運動である。1960年の世界デザイン会議において『METABOLISM/1960-都市への提案』を発表し、海上都市や塔状都市などの新陳代謝する都市を提案した。

〈メタボリズム〉とは、もともと生物学的用語で新陳代謝を意味する用語であるが、転じて人口の増加や技術の発展に合わせて有機的に成長する都市や建築をテーマとした建築運動を意味するようになった。この考え方は、日本の伝統的な木造建築に見られる可変性や更新性に端緒がある。

「日本建築の歴史が、木造建築の歴史であるため、とり替えの問題を非常によく観察することができるし、ユニークな秩序がそこに創造されているのみ

ることができる。」(『代謝建築論 か・かた・かたち』/菊竹清訓/彰国社/1969/p19)

〈メタボリズム〉の考え方は建築家によってそれぞれ異なる。菊竹の〈メタボリズム〉は独立して間もない頃に設計した移築・改築の作品の中で、見出した「とりかえ」の考え方が発展したものである。この「とりかえ」は時間経過の中での社会の変化や生活の変化に空間をいかに対応させるかを考えたものであった。

緒言

調査概要

調査結果

市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯

資料編



Fig.2-3-1. 菊竹清訓 提供：情報建築

【略歴】

1928 福岡県久留米市に生まれる。
 1950 早稲田大学理工学部建築学科卒業
 株式会社竹中工務店入社
 1952 村野・森建築設計事務所入所
 1953 菊竹建築研究所創設
 1958 自邸「スカイハウス」を計画（実験住宅）
 1959 「海上都市」「塔状都市」を『国際建築』誌上に発表
 1960 川添登などとメタポリズム・グループを結成
 世界デザイン会議にメンバーとして出席
 1962 チームX第2回会議に丹下健三、槇文彦とともに招かれる
 菊竹清訓建築設計事務所に改称
 1963 設計仮説<か・かた・かたち>の方法論を発表
 1964 ハワイにて菊竹清訓展を開催
 1965 東急多摩田園都市開発計画に、チャンネル開発（情報ネットワーク）の計画発表
 1971 海上都市計画コアメンバーに招かれる
 1972 田中内閣のもと、日本列島改造問題研究会で経済成長論ばかりの中、「美しい国土」を委員の中で唯一人提案。
 1975 沖縄海洋博で政府出展海上施設「アクアポリス」の空間意匠プロデューサーをつとめる
 1977 文京区基本構想審議会委員
 1985 東京都新都庁舎指名設計競技審査員
 21世紀をめざした空港の将来像に関する調査委員会委員（運輸省）
 科学技術庁 国際科学技術博覧会（つくば'85）マスタープラン作成委員をつとめる
 1988 なら・シルクロード博のハードプロデューサーをつとめる
 1993 電力中央研究所・有識者会議メンバー
 1995 論文『軸力ドームの理論とデザイン』で早稲田大学より工学博士をうける
 アムステルダムでの国際会議“Tall Buildings & Urban Habitat”
 で極超高層建築の基調講演。
 1996 長野オリンピック冬季競技大会の空間構成監

督をつとめメガ・スタンドを計画
 1997 ワールド・エコノミック・フォーラム（ダボス会議）スイス本部の基本設計
 1998 MoCA 主催の世界巡回展「世紀末建築展」で「海上都市」が出展される（1998-2001）
 1999 ポンピドーセンターの要請により「海上都市」の模型とドローイングがコレクションに加えられる。
 2000 ユーゴスラヴィア・ビエンナーレで「今世紀を創った世界建築家100人」の一人に選ばれる
 2001 2005年日本国際博覧会総合プロデューサーに就任

【主な役職】

1971 アメリカ建築家協会（AIA）特別名誉会員
 1982 日本建築家協会副会長
 1989 新日本建築家協会理事
 1991 国際建築アカデミー（IAA）アカデミシャン・アジア代表
 日本マクロエンジニアリング学会会長
 1993 東京建築士会会長
 1994 日本建築士会連合会副会長
 フランス建築アカデミー会員
 ブルガリア建築家協会名誉会員
 北京工業大学名誉教授
 1996 建築士会会長として特別名誉会員
 1998 日本建築士会連合会会長
 2002 日本建築士会連合会名誉会長

【教職歴】

1959～1990 早稲田大学理工学部講師
 1964 南カリフォルニア大学客員教授
 1971 ハワイ大学客員教授
 1978 東京YMCA デザイン研究所所長
 1980 アーヘン大学客員教授
 ヴァージニア大学客員教授
 1982 東京大学工学部建築学科講師
 1985 プエノスアイレス大学名誉教授
 1987 ペルー国立大学名誉教授

はじめに

緒言

調査概要

調査結果

市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯

資料編

はじめに	放送大学客員教授（都市の研究） 1988 国際建築アカデミー（IAA）教授 1990～1993 早稲田大学大学院客員教授
緒言	1990 千葉工業大学デザイン学科教授 1990 ARK 都市塾講師 1991 工学院大学大学院客員教授
調査概要	1993～ 早稲田大学理工学総合研究センター客員教授 1994 北京工業大学名誉教授
調査結果	2010～2011 九州大学 産学連携センター デザイン総合部門 客員教授
市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯	【コンペ歴】 1945 1945「国鉄久留米駅舎」コンペ1等 1947 1947「仙台ショッピングセンター」コンペ3等入賞 1948 1948「広島平和記念カトリック聖堂」コンペ3等入選 1951 建築学会主催「テラスハウス」コンペ入選 1952 1952 建設大臣賞「ローコストハウス」競技設計一等 1962「国立京都国際会館」コンペ優秀賞
資料編	

【受賞歴】

- 1964 第15回日本建築学会賞（日本建築学会）
- 第14回芸術選奨文部大臣賞（文部省）
- 第7回汎太平洋賞（AIA）/ 出雲大社庁の舎
- 1970 日本建築学会特別賞 / 日本万国博覧会（大阪）ランドマークタワー
- 1975 久留米市文化功労賞（久留米市）
- 1978 第8回オーギュスト・ペレー賞（UIA）/ 作品と方法論
- 1979 第21回毎日芸術賞受賞 / 京都信用金庫一連の作品
- 1990 第31回建築業協会（BCS）賞 / 川崎市市民ミュージアム
- 1991 第4回奈良市建築文化賞 / 奈良公園館
- 1995 平成7年度 BELCA 賞ロングライフビルディン

- グ部門 / 出雲大社庁の舎
- 2000 国際建築アカデミークリスタルグローブ大賞 /
- 2004 第9回公共建築賞特別賞受賞 / 島根県立美術館
- 2006 早稲田大学芸術功労者受賞
- 春の叙勲「旭日中綬章」受章
- 2007 第1回日本建築栄誉賞（日本建築士会連合会より）ー建築文化への功績

【主な著書】

- 『代謝建築論』（彰国社）
- 『メタボリズム 1960』（美術出版社）
- 『人間の建築』、『人間の都市』、『人間の環境』（井上書院）
- 『建築のこころ』（井上書院）
- 『菊竹清訓作品集』（求龍堂）
- 『メガストラクチャー』（早稲田大学出版会）
- 『エコポリス・海岸都市』（勁草書房）『博物館の未来』（鹿島出版会）
- 『海上都市の話』（NHK 出版）
- 『日本万国博の建築』（朝日新聞社）

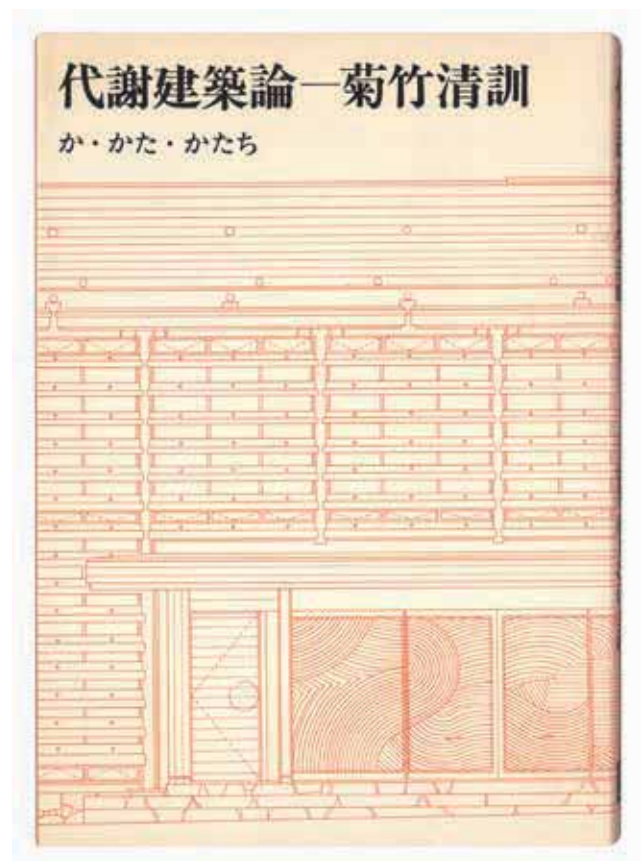


Fig2-3-2. 『代謝建築論』（彰国社）

2-4. 都城市民会館の歴史

2-4-1. 設計段階

教育者だった都城の蒲生市長が、瀬戸山建設大臣のすすめで菊竹清訓の事務所に来訪し、1500人が集まれる大きな屋根をつくってほしい、また、予算がないので、それを順次整備していきたいとの打診があり、旧市民会館の設計が開始された。

都城では国鉄の1500人の労働者が年2回集まる場所が求められていた。そして、この労働組合の大会を受け入れることにより、国の補助金が得られた。旧市民会館(1966)の設計は1964年から開始され、東光園(1965)・徳雲寺納骨堂(1965)・パシフィックホテル茅ヶ崎(1967)・佐渡グランドホテル(1967)等の素晴らしい菊竹清訓の作品がその前後につくられている。同様のホールの施設としては、萩市民会館(1969)・久留米市民会館(1969)がある。

一方、1964-1966年に在籍していた所員は、38人(「菊竹学校」所員在籍年表による)で、計画段階の1964年頃は17人が在籍していた。旧市民会館は、内井昭蔵が設計段階のチーフとなり、遠藤勝勸、小川(久慈)惇、土井鷹雄、武者英二らが担当し、設計が進められた。担当からいくつかの提案がされていたが、「構造を一極的に集中させて、そこに光や設備の装置と構造が一体になったものをつくりたい。地盤が悪いから、そういうものにしたいんだ。」と菊竹から言われ、まだ新人だった長谷川逸子が乳母車の幌を書いて、「上の方が開いて、外のようなところで音楽会をやって、労働者が集まるときは閉じるのはどうですか」と提案し、結果として乳母車の幌のような形態となっていった。(LIXILeye 03 2013.10「新時代に挑戦した先駆者」より)そして設計が進み、大屋根部分の旧市民会館が鉄筋コンクリート造で、南側の結婚式場等のある公民館が鉄骨造とそれぞれ別構造で図面がつくられていった。

2-4-2. 着工から竣工まで

予算の出所が異なることから、着工前まで、南側の公民館部分(都城市の単費)は鉄骨造、旧市民会館部分(国の補助事業)は鉄筋コンクリート造で図面はできていたが、着工時に一体構造でよいとの判

断があり、1階を全て鉄筋コンクリート造で建築することになった。断面図から確認されるが、大屋根は鉄骨造で東西各1箇所集中的に支え、他は鉄筋コンクリートの平屋の構造体という、明解なシステムで構成されている。なお、旧市民会館の舞台、南側公民館の屋根部分のスラブは厚さ300mmのボイドスラブでつくられている。構造設計は早稲田大学の松井源吾であった。

工事段階の工事監理は、菊竹事務所と都城市の協同で進められた。工事中には、折角の機会だと言うことで、地元の高校生が金属屋根工事の一部を実地で手伝うことも行われた。そのため学生が屋根に上がれるように、屋根工事を担当した当時の三晃金属は金属屋根の厚みを0.3mmから0.4mmに若干アップされたとも言われている。この金属屋根は、スタンディングシステムという名で呼ばれていた工法で、亜鉛鉄板厚み0.4mm幅300mm前後の鉄板の左右を立ち上げて、隣接する立ち上がった鉄板端部をハゼ状に折り曲げ、その部分を締め付けて一体にしたものである。亜鉛鉄板の下に、モルタル50mm、25mm前後の木毛板があり、それを100mm角の角材で屋根南北に走る7本のリブ(上下のC型鋼の間に鉄筋をトラス状に組み、下端のC型鋼から100mm角の部材を吊っている)から固定し、断熱材(トムレックス)15mmを内部側に吹付けている。(当時の三晃金属は小間沢氏が担当していた。)そして、1966年4月1日に竣工式が行なわれた。

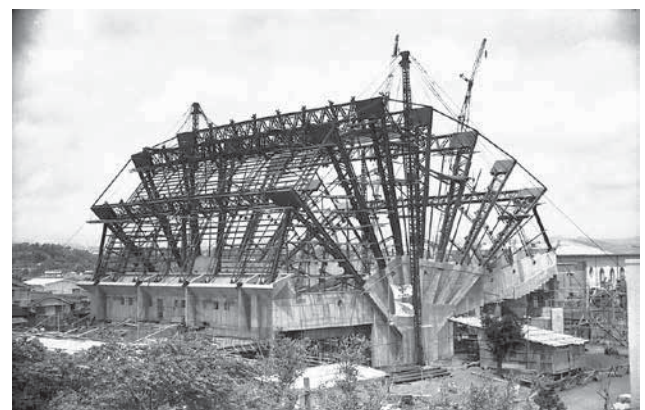


Fig2-4-1.1965年鉄骨建方工事写真 所蔵：都城市

はじめに

緒言

調査概要

調査結果

市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯

資料編

はじめに

2-4-3. 竣工後

当時の最新の技術でこの旧市民会館は完成したが、これまで経験したこのない形状でもあり、工事は困難を極めていた。当然、予算も潤沢ではなく、限られた予算で、完成させる必要があった。当時、考えられる様々な技術を使い、象徴的な建築はできたが、竣工後のトラブルもいくつか発生した。主なトラブルとして、漏水、外部鉄骨の耐火被覆モルタルの落下等があり、また、竣工後 市長が代わったこともあり、菊竹清訓建築設計事務所の対応に奔走していたと言われる。

また、隣接地には昭和2年に約600人が集まって落成式を行った市公民館（須田記念館）が建っていたが、しばらく利用された後に取り壊され、菊竹清訓は残念がっていた。

旧市民会館は、メタポリズムの代表作と言われている。そして、メタポリズムは新陳代謝する建築と理解されているが、菊竹清訓は、全てが建て替わっていくことを望んでいたのではなく、新陳代謝しながら、後世に永く使われていくことを考えていたのかもしれない。いずれにしても、変わると部分と変わらない部分とを考え建築を構成した旧市民会館は、メタポリズムを表出した代表作品として評価されており、世界的にも価値高い建築作品のひとつである。また、後の都城市長が、海外歴訪の際に、海外で旧市民会館に対する賞賛の声を聞き、竣工後15年ほどして、メンテナンス等が実施された。



Fig2-4-2.1966年旧市民会館開館式 所蔵：都城市

2-4-3-1. 豪雨による漏水

旧市民会館の鉄骨の大屋根は、非対称で曲率も

一定でない特殊な形状である。竣工して4ヶ月後、1966年8月に都城に豪雨があり、壁、屋根から漏水が発生した。早速、1966年8月31日に菊竹清訓建築設計事務所の所員が立ち会い現地では注水による漏水実験を行なったが、漏水は確認できなかった。しかし、その日に激しい夕立があり、壁、屋根からの漏水が確認された。壁は厚み4cmのふじなみラスシートできており、壁から漏水したのは材料を横貼りしたためと考えられ、目地をシールで止水して対応工事を実施した。屋根は前面の急勾配部分をはじめ、全面から漏水しており、たてはぜ部分の締め直しや、7本のリブ部分の立ち上がりの納まりの改修による漏水対策が実施された。これらは設計者、施工者の負担で行われたと言われている。

現在このスタンディングシステムの後継として、三晃金属からステンレスによるRT工法が開発されており、札幌ドームをはじめとする複雑な曲面の形状に採用されており、現在の技術で改修すれば漏水は防げると推察される。



Fig2-4-3.1966年ホール雨漏りの様子 所蔵：都城市

2-4-3-2. 外部鉄骨の耐火被覆モルタルの撤去

1970年10月9日に、大屋根の鉄骨を塗り固めていたモルタルが剥離落下した。人身事故につながる可能性もあり、10月14日に菊竹清訓建築設計事務所の遠藤勝勸が現場を確認した。この落下したモルタルは、大屋根の鉄骨の耐火被覆としてラスを入れて鉄骨を覆うように塗り固められたもので、雨水によりラスが錆びてしまい落下した。この後、建設省（現在の国土交通省）に遠藤勝勸は呼び出され、事情聴取を受けるとともに1965年の自身の手帳まで没収された。翌年の1971年4月20日には、菊

竹清訓が建設省へ呼び出され、菊竹清訓建築設計事務所は営業停止とまで言及された。しかし、菊竹事務所側が4月22日に保管されていた建設省の耐火被覆モルタルの指示書を建建設省へ提出した。この耐火被覆のモルタルは原設計にはなく、あらかしの鉄骨だったが、建設省の指示で耐火被覆のモルタルを塗ったことが確認された。経緯を説明した結果、菊竹清訓建築設計事務所は営業停止を免れ、鹿島建設が負担してこのモルタルを撤去し現在の姿になった。これらの経緯は宮崎県、都城市にも報告された。新たなデザインにチャレンジすると現行の法規や基準に適合できず、このような事象が発生したと考えられる。



Fig2-4-4.1970年モルタル剥落の様子 所蔵：都城市

2-4-3-3. 2階（楽屋・道具庫等）の増築

旧市民会館の楽屋は、現在の舞台の後部に設けられており、機械室横の廊下と楽屋を結ぶ階段で直接アクセスしていたが、公演の大規模化等で手狭になり、1980年に鉄骨造の楽屋、大道具庫、トイレ等が、屋上に増築された。将来撤去できるように菊竹清訓建築設計事務所が設計し施工されており、容易に撤去することが可能な構造で設けられている。屋上へアクセスしていた階段は内部化されたり、一部使用ができなくなった。また、この改修に際して、1階のロビーの増築、ホール客席も改修された。1階ロビーは奥行きを拡大するため、ガラスの間仕切りを外部側に1スパン移動して新設、風除室が設けられ、チケット売り場の増設等が行われた。2階のホールは、椅子が交換され、ホール客席にあった2箇所の階段部分が客席に変更され、舞台もそれまでの楽屋を撤去した範囲、舞台スペースの拡張と床板の張り替えが行われた。

2-4-3-4. エレベーターの設置

1993年に、1階ロビーと2階ホールを結ぶ車椅子用エレベーターが増設された。2階にはロビーがないため、直接ホール内に出る構造で車椅子用の観覧スペースも設置された。

2-4-3-5. 電気室の増築

昭和46年ころに排煙設備が義務つけられ、スプリンクラー設備等の消火設備が必要となったと推測され、敷地南西部に平屋の電気室が別棟で建てられた。内部には受電設備、発電設備等と消火ポンプが設けられた。また、南東側には地域利用施設の諸室が増築されている。



Fig2-4-5.1980年1階ロビー増築後の様子 所蔵：都城市

はじめに

緒言

調査概要

調査結果

市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯

資料編

はじめに	2-4-3-6. 設計から閉館までの年表	
緒言	1964 春	蒲生市長が菊竹氏に市民会館の設計を依頼
調査概要	12	市民会館、竣工前に雨漏り
調査結果	1966 4	市制施工 40 周年を記念して建設・竣工（市所管：総務民生部 市民会館） 雨漏り補修工事を行うも防げず
市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯	5	噴水 通水式
資料編	6	ストーンスピーカー譲渡式 冷房使用開始
	7	鹿島建設 雨漏り調査
	8	雨漏り修理に関して菊竹事務所から遠藤氏来訪
	9	結婚式 102 組目達成
		菊竹事務所、鹿島建設による雨漏り改修スタート、結果的に雨漏りを防げず
	5	雨漏り補修工事を行うも防げず
	1969	市民会館の市所管が【総務部 市民会館】に変更
	1970 10	屋根の部材一部落下事件
	1971	市民会館の市所管が【市民部 市民会館】に変更
	1974	結婚式場を 3 室から 2 室へ（各室 50 人収容を 70 人に変更）
	1975	高圧ケーブル等取替工事、池改修工事
	1976	塗装工事、設備工事 台風 12 号上陸、市民会館被害なし
	1977	夜間照明設備工事
	1978	市民会館の市所管が【総務部 市民会館】に変更
	3	明大都城駿大クラブより会館へ掲示板寄贈
	7～9	防災工事（排煙設備設定）
	1979 8	会館設計者：菊竹清訓来訪（改修関係） 大改修工事（～ 1980）（ホール拡張、楽屋・練習室の新設、ロビーの拡張等）
	1980	舞台改修に伴う増設及び新設工事
	3	菊竹事務所の遠藤氏、改修打ち合わせの為来訪
	8	遠藤氏（菊竹事務所）、鹿児島大学徳広教授、早稲田大学松井教授来訪。構造診断打ち合わせ。
	1981	構造診断を菊竹建築設計事務所に依頼
	1984	防水・防錆工事、改修工事
	1985	収納庫増設、モルタル剥離防止工事、水呑み場設置
	1986	設備改修及び取替工事
	4	市民より色鯉 9 匹寄贈
	7	客席雨漏り、ビニルシートで応急処置 緞帳更新（解体前のもの）
	1987	設備取替工事
	1988	塗装工事及び設備取替工事
	1990	塗装工事及び設備取替工事
	8-9	工事の為休館（8/18-9/24）
	9	開館 25 周年記念事業

1992		食堂廃業
1993		ホール客席にエレベーター設置
	6	結婚式場を閉鎖、会議室・練習ホールへ用途変更
1994		設備取替工事
1995		ロビー床張替工事
1996		設備改修及び取替工事
1997		雨漏り補修、設備修繕工事
	2	開館30周年記念事業
	6-9	フランスにて市民会館の模型展示
1998		舞台幕更新、設備改修
1999		駐車場工事
2000		設備改修及び取替・修繕工事
2001		防水工事、設備修繕工事
2002		設備改修工事
2003		改修工事（設備改修、修繕、取替）
2004		市民会館の市所管が【文化振興課】へ変更 設備改修
2005		市民会館の市所管が【ウエルネス課】へ変更 設備修繕工事
2006		市民会館の市所管が【生活文化課】へ変更 設備修繕及び道路閉鎖工事
2007	1	休館
	3	閉館

- はじめに
- 緒言
- 調査概要
- 調査結果
- 市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯
- 資料編

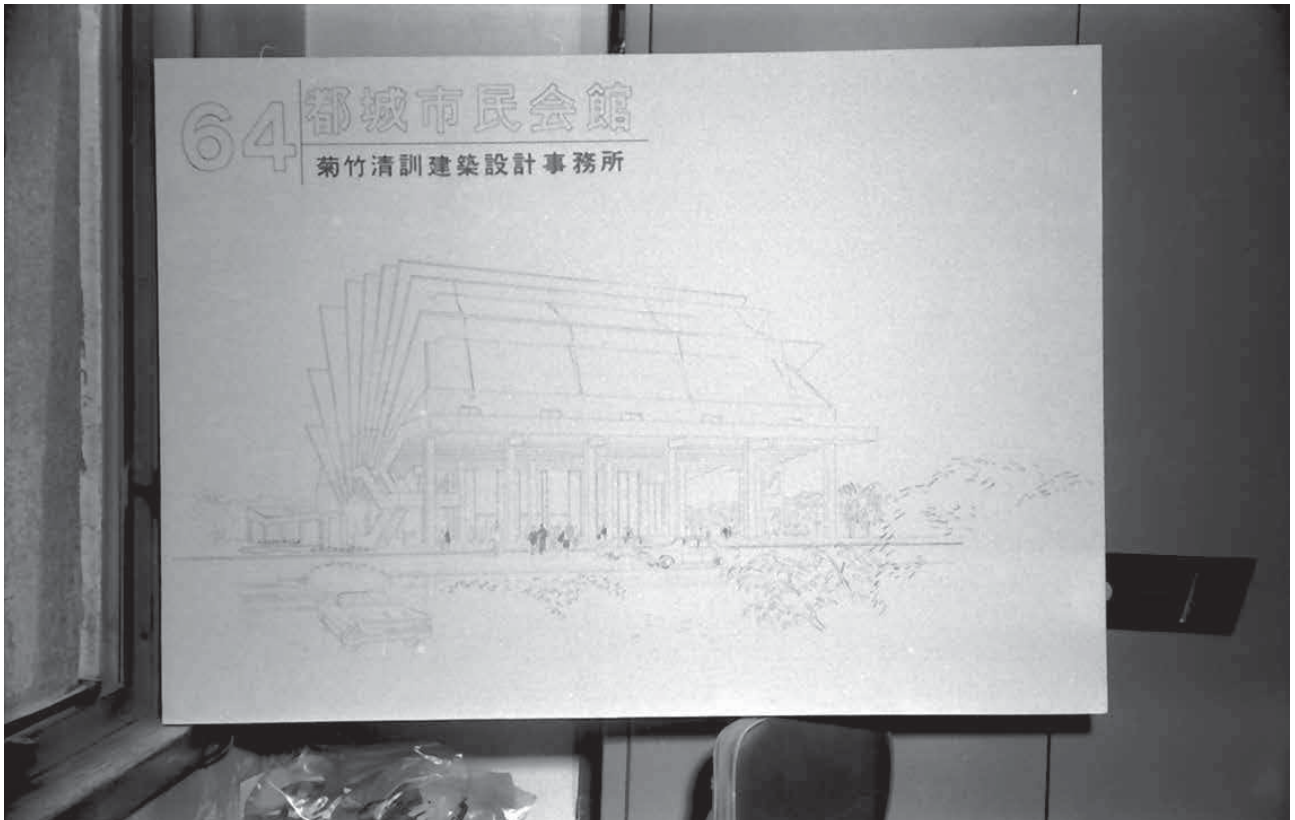


Fig2-4-6.1964年旧市民会館議会説明時のパネル 提供：都城市

はじめに

2-5. 参考資料

緒言

■菊竹清訓著書

- ・『メタボリズム 1960』川添登編 美術出版社 1960年7月初版
- ・『菊竹清訓 作品と方法 1956-1970』菊竹清訓・川添登編 美術出版社 1973年3月
- ・『人間の建築』菊竹清訓著 井上書院 1978年11月改訂第一版
- ・『人間の環境』菊竹清訓著 井上書院
- ・『代謝建築論か・かた・かたち』菊竹清訓著 彰国社 1969年1月第一版
- ・『建築のこころ』菊竹清訓著 井上書院 1973年2月第一版
- ・『《現代の建築家》菊竹清訓』SD編集部編 鹿島出版社 1983年6月
- ・『菊竹清訓作品集1「型の展開」』菊竹清訓編 求龍堂 1990年1月
- ・『菊竹清訓作品集2「型」の概念』菊竹清訓編 求龍堂 1990年12月
- ・『菊竹清訓作品集3日本型住宅』菊竹清訓編 求龍堂 1992年6月
- ・『日本型住宅の歴史と未来像』菊竹清訓著 学生社 1992年3月初刷

■菊竹清訓関係著書

- ・『菊竹学校伝えたい建築をつくる心』「菊竹学校」編集委員会編 NPO 法人建築文化継承機構 2015年1月初版第一刷
- ・『建築のこころ—アーカイブにみる菊竹清訓』文化庁監修・発行 2014年
- ・『菊竹清訓巡礼』磯達雄、宮沢洋著 日経 BP 社 2012年12月初版第一刷

■関連図書

- ・『神殿か獄舎か』長谷川堯著 相模書房 1974年2月第二刷
- ・『メタボリズムとメタボリストたち』大高正人・川添登編 美術出版社 2005年5月初版

- ・『プロジェクト・ジャパン メタボリズムは語る ...』レム・コールハウス、ハンス・ウルリッヒ・オブリスト著 太田佳代子編 平凡社 2012年2月初版第一刷
- ・『メタボリズムの未来都市展—戦後日本・今甦る復興の夢とビジョン』広瀬麻美他編 新建築社 2011年9月17日初版第一刷
- ・『石橋文化センター 50年史 1956-2006』財団法人久留米文化振興会編 財団法人久留米文化振興会 2008年3月
- ・『石橋文化ホール、開場す。』中野政則 2000年8月12日
- ・『こどもと住まい(上)』仙田満編 住まいの図書館出版局 1990年8月第一刷
- 『メタボリズム・ネクサス』八束はじめ オーム社 2011年4月第一版第一刷

■雑誌

- ・『新建築 1956年12月号』新建築社 1956年12月
- ・『新建築 1966年7月号』新建築社 1966年7月
- ・『新建築 1969年7月号』新建築社 1969年7月
- ・『新建築 2012年5月号臨時増刊菊竹清訓 KikutakeKiyonori』新建築社 2012年5月
- ・『建築文化 1960年1月号』彰国社 1960年1月
- ・『建築文化 1963年1月号』彰国社 1963年1月
- ・『建築文化 1961年2月号』彰国社 1961年2月
- ・『建築文化 1961年12月号』彰国社 1961年12月
- ・『建築文化 1975年10月号』彰国社 1975年10月
- ・『建築 1961年11月号』青銅社 1961年11月
- ・『建築 1965年10月号』青銅社 1965年10月
- ・『建築 1966年7月号』青銅社 1966年7月
- ・『建築 1969年7月号』青銅社 1969年7月
- ・『国際建築 1961年6月号』美術出版社 1961年6月
- ・『建築雑誌 1965年11月号』一般社団法人日本建築学会 1965年11月
- ・『ジャパンインテリア 1967年2月号』ジャパン・

調査概要

調査結果

市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯

資料編

インテリア 1967年2月

- ・『SD1966年7月号』鹿島出版社 1966年7月
- ・『近代建築 1961年11月号』近代建築社 1966年11月
- ・『JA73号』新建築社 2009年4月
- ・『LIXILeye no.3』LIXIL 2013年10月
- ・『INAX REPORT No.134』INAX 1998年3月

はじめに

緒言

調査概要

調査結果

市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯

資料編

- はじめに
- 緒言
- 調査概要
- 調査結果
- 市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯
- 資料編



Fig3-0-1. 解体工事の様子 2019年10月16日